

2008年3月20日「政治的虚偽の記念日」に、世界各地で朗読会を開催するための呼びかけ

文化政治振興機関・ペーター・ヴァイス財団が、劇場および関心を抱いている人々に向けて、政治的虚偽の記念日である3月20日に、世界規模の朗読会開催を呼びかけるのも3度目となりました。今回朗読されるテキストは、中国の小説家、魯迅（1881-1936年）の随筆『忘却のための記念』です。

オリンピック北京大会（2008年8月8日-24日）開催目前のこの時期に、大量の死刑者数やチベット問題、スーダンにおける政権への肩入れ、そしてとりわけ市民活動家の逮捕といった現代中国史のテーマを取り上げる際の発言封じ、国家による検閲に注意を喚起することには、多大な意義があります。わずか3週間前にも、HIVウイルス感染者問題と人権保護への取り組みで名を知られる34歳の活動家、胡佳（Hu Jia）氏が半年間の自宅監禁刑に処されました。

中国は、ある種のテーマに関しては記憶を持たない国です。1990年代に中国で大きくなった世代のほとんどは、天安門事件の起こった1989年6月4日のことを知りません。文化大革命について研究することは許可されていません。1956年から57年にかけて行われた「百花齊放百家争鳴」キャンペーンの期間中に、刑務所あるいは労働キャンプへ送り込まれた50万人の知識人について公に語ることは禁じられています。中国政府は調和を説いています。中国は、革命の保証人だと自ら任じたはずの中国近代小説の父、魯迅が、中国人の記憶をくりかえし揺り動かしていることから、魯迅に疑いを抱きはじめています。

アメリカの複数の大学の授業計画から魯迅が姿を消した後、中華人民共和国の教育省は2007年夏、1989年6月4日の事件をほうふつとさせる魯迅のある文章を教科書からはずし、金庸の武侠小説に置きかえはじめました。

魯迅は、人生を通じて検閲に脅かされてきました。1949年以降、彼の作品と写真はその時どきの政治的な状況に応じて編集され、解釈を与えられてきました。

今回の催しの目的は、政治的コミュニケーションの内容と形式に関する意識に光を当てることにあります。21世紀が始まったばかりの今、虚偽がある種の政治的な構成手段に属している以上、こうした虚偽に抗議する力が衰えはしないことをはっきりと示さねばなりません。

ペーター・ヴァイス財団は、イラク紛争が開始から3年目を迎えたことを機に、2006年3月20日に第1回目となる世界規模の朗読会の開催を提唱しました。その際の「政治的虚偽の記念日」では、エリオット・ヴァインベルガーの「私がイラクで聞いたこと」が、各地の朗読会およびラジオ放送で朗読されました。2007年の3月20

日には、120万人以上がアンナ・ポリトコフスカヤによる2本のルポルタージュに耳を傾けました。

魯迅のテキストは、文化政治振興機関・ペーター・ヴァイス財団が用意しています。2008年3月20日に開催される「第3回政治的虚偽の記念日」朗読会へのお問い合わせは、[info@peterweissstiftung.de](mailto:info@peterweissstiftung.de) までお願いします。